

令和元年度自己評価シート(年度末評価)

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	小林泰崇	全・ <input checked="" type="checkbox"/> 定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	----	-----	--------------	------	------	--	---

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当部等
		実績値	目標値	実績値			
1 考え抜く力の育成							
1) 基礎学力の定着を図る中で、学んだ知識を活用しながら主体的に問題を解決していく力	a) 定期考査における基礎力定着問題の通過率(国・数・英)	国語 69% 数学 57% 外国語 66%	70%	国語 67% 数学 57% 外国語 47%	B	いずれも3学期中間の数値である。目標値には届かなかったが、習熟度で分けている1年次生の通過率の差は縮まってきており、学び直しや反復学習の成果は表れている。	教務部
	b) 定期考査における活用問題の通過率(国・数・英)	国語 64% 数学 57% 外国語 30%	55%	国語 54% 数学 48% 外国語 48%	B	数学と英語の通過率は目標値より下回った。正答にはならなくても取り組みもうとする割合は増えてきており、Bとした。	教務部
2) 学んだことを自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、粘り強く学び続ける力	c) 自己の将来を見据えた検定試験受験者数(新たな級や新たな資格にチャレンジする生徒の数)	18人	30人	8人	C	数値が目標に達していないためCとした。受験者の内訳は英語検定0名、情報検定8名である。	教務部 進路指導部
	d) 卒業年次の進路実現率	78.9%	100%	95%	B	卒業予定者20名中、現在13名の進路が決定している。 ・大学 3名 ・専門学校 5名 ・就職 11名 残り1名は就職活動を継続中である。専門学校においても1名が結果待ちである。	進路指導部

【評価結果の分析】

a) 習熟度別のクラス編成をしている1年次の標準クラスと発展クラスを比較すると、国語については小テストなど反復学習によって基礎的な学力は定着してきており通過率の差は縮まっており成果は表れている。数学や英語はより学力差が大きく、特に苦手意識を持つ生徒の学力の底上げが課題である。特に英語については、生徒が特に苦手とする音声指導を取り入れ、英語の文字・音声・意味の一体化を図っていることも影響していると考えられる。

b) 国・数・英3教科とも教科担任が変わり、考査問題の出題傾向も変わっているため、単純に前年度実績との比較はできない。1年間の数値の推移をみると通過率としては下がった教科もあるが、授業内容や考査問題の難易度が徐々に上っているためである。活用問題は各教科が工夫し、自己の将来につながるものや、身近なテーマを出題している。通過率につながる正答でなくても試行錯誤しながら記述する生徒の割合は増えており、無答率は低下している。

c) 英語検定については、当初受験を予定していた生徒が進学のための受験と近いことや、検定受験が直接進路希望に結びつかないことを理由にモチベーションが下がり今回の受験にはつながらなかった。情報検定の受験者も2・3年次生で1年次生の新たな受験者はいなかった。

d) 卒業予定者20名の内、13名が進路を決定している。希望の進路を決定している生徒は、夏季進路指導へ参加し早期からの取り組みや準備ができた生徒が多い。専門学校や大学等への進学を希望する生徒も増加傾向にある。就職とあわせて希望進路の実現に向けて、今後も組織的な取組を展開していく必要がある。課題としては、昨年までは年内に多くの生徒が進路決定をしたが、今年度は、身体的な事由や出席状況が十分でない等の理由から、早期から出願ができないケースもあった。また、進路に対する目標や意識が十分に育成できていない生徒が少なからずいた。今後の生徒の進路指導の在り方に課題が残った。

【今後の改善方策】

a) 基礎力定着問題は、主要科目の国・数・英で出題し通過率の推移をみているが、数値には表れない一定の成果が出ていると考える。学び直しを含め反復学習を行うことで、できなかったことができるようになり、生徒の自信につながっている。また、国語科の小テストや英語科のモジュール学習や音声指導などは導入時の生徒の集中力を高め、落ち着いた学習環境づくりにも役立っている。これらの取組は今後も継続していく。学力差はどの年次も開きがあり、特に学び直しから必要な生徒の基礎学力をつけていくことが課題となっている。生徒個々の習熟に合わせたプリント等を工夫することで、学力の定着を図る取組を次年度も継続して行う。

b) 身近な課題に関する関心の高さはどの教科においても共通しており、無答率が下がっている。また、学年が上がるにつれて形式に慣れ記述する割合が増えている。身近な課題には主体的に取り組みもうとする姿勢が見られ、発問や指示の仕方などで意欲の変化は大きくなっており、より効果的な教材選択や活用の仕方の指導方法など授業改善を進めていく。

c) 今回の受験にはつながらなかったが、放課後等の時間を利用した個別指導は行っており、引き続き個別の声掛けや指導を行い、次年度の受験につなげていきたい。初めての受検となる1年次生については進路講演会等で検定の活用方法を丁寧に説明したり、2年次進級の際の動機づけを行ったりするなど、将来の進路につながる取組と位置付けて、さらに受検に向けた取り組みを組織的に行っていく。

d) 年度末までに全員の進路決定が実現するよう、組織的に粘り強い取り組みを継続していく。不登校傾向のある生徒や進路に対する意識が十分に育成できていない生徒については、出席状況だけでなくコミュニケーション能力、自己の進路を描いていくキャリア形成能力の育成を検討していく必要がある。そのためには、個々のキャリア形成能力を分析し、低学年次からの指導の在り方を検討していかなくてはならない。全体としては、生徒の学校への定着、保護者への情報提供、連携の強化が課題である。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
2 前に踏み出す力の育成							
3) 周りの人との関わり合いを通して、社会性を身に付け、自らの進路を切り開いていくことができる力	e 自ら進んで毎日挨拶をすることができる生徒の割合	89%	90%	83%	C	挨拶向上実績度数は、目標値より7%下回った。	生徒指導部
	f) 月刊遅刻者数が1以下の生徒の割合(年間11以下)	23%	30%	32%	B	月刊遅刻数が1以下の生徒は目標値をクリアしており、前年度からは9%増加している。	
	g) 前年度の問題行動の発生件数と比較した減少率	-10%	-10%	-7%	B	問題行動の発生件数は10%減少している。	

【評価結果の分析】

e) 「挨拶向上実績度数アンケート」において、「挨拶をしている」と答えた生徒の割合は83%であり、目標値を下回った。2年から4年までは挨拶をする生徒に変化はなく、1年の生徒のなかに自分に自信が持てず、自らすすんで挨拶をすることに対して恥ずかしさと抵抗感を持つ生徒がいることが伺える。登校時及び下校時の指導場面における挨拶の習慣化と自己肯定感の醸成が必要である。

f) 月刊遅刻数が1以下(4ヶ月で4以下)の生徒の割合は32%であった。目標値の30%よりも2%上回った。昨年度は23%であり、昨年度と比較すると9%増加している。特に1年において遅刻をほとんどしない生徒が増加した。一方で、常習的に遅刻を繰り返す生徒も少なからずいる。学年が上がるにつれてその傾向がみられる。

g) 前年度の問題行動発生件数は97件であり、今年度は90件であった。7%減少している結果となった。ただし、喫煙や喫煙につながる行為への指導数は増加した。校内巡視や教員の組織的な対応によって、問題行動を認知する件数が増加したこともあるが、同じ生徒が問題行動を繰り返す傾向がみられ、再発を防ぐ指導の在り方を工夫していく必要がある。全体としては、行動面において落ち着いてきた。

【今後の改善方策】

e) 挨拶を苦手としている生徒に対しても、校舎内外で教員から積極的に挨拶をし、範を示すことが効果的と考える。また、学校の教育活動全体を通して、自己肯定感を高めさせ、自分に自信を持たせる必要がある。例えば、スポーツ大会や文化祭などの学校行事を通して協働性を育むとともに、積極的に他者とコミュニケーションをとることの意義を体感させる。

f) 遅刻と欠課時数の増加は密接に関連している。生活リズムが乱れ、欠課時数が多くなっている生徒に対しては、正しい生活習慣を身につけさせる必要がある。全体への声かけだけでなく、日常的に保護者と連携をとるとともに、個別に指導・助言する機会を定期的に設定する丁寧な指導を行う。

g) 特に、喫煙や喫煙につながる行為については、今年度も校内外で指導をしている。年度末には少しではあるがその数も減少してきた。来年度も引き続き巡視や注意喚起を継続する必要がある。また、年度当初は、ルールを理解できていない生徒が問題行動を繰り返す場面があったため、生徒及び保護者に丁寧に学校の決まりを理解してもらえるように、行事やホームルーム等の機会を捉えて複数回、説明場面を設定しルールの明確化を図る。問題行動があった場合の対応を、保護者と密に連携をして行う。そのためにも、日常的な連携が大切だと考える。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
3 チームで働く力の育成							
4) 「体験的な学び」を通して、社会的な視野を広げるとともに、他者と協働して課題に取り組んでいくことができる力	h) 学校行事に対する満足度（+生徒の具体的な変容）	84%	92%	86%	B	学校生活アンケートによる学校行事への満足度は86%だった。 行事後のアンケート： ・スポーツ大会86.8% ・文化祭91.4% スポーツ大会、文化祭とも生徒会執行部を中心に生徒が主体的に企画準備運営に参加している様子がうかがえた。	保健美化部
	i) 「体験的な学び」を通して、社会的な視野が広がった生徒の割合	100%	100%	100%	A	今年度、「体験的な学び」の場として、新たな学校行事を複数行うことができ、参加した生徒の感想からも社会的な視野を広げることができたと考える。	教務部 生徒指導部
	j) 各種ボランティア活動等への参加率（校外清掃への参加を含む）	62.3%	75%	78%	B	毎月1回LHRで、または考査前に清掃活動を実施し、教室以外の場所（トイレや廊下、昇降口、久松台周辺、特別教室）の清掃にも取り組んでいる。 ペットボトルの分別リサイクルへの理解と関心も高まり、分別が進んだ。これらの活動を通して校内外の美化活動への関心を高めることや責任感、達成感自己有用感を得られる場面を作っている。	保健美化部 進路指導部

【評価結果の分析】

h) 学校生活アンケートでは、学校行事への満足度は86%であった。目標値には届かなかったものの、昨年度の実績値を上回った。本年度は、2年ぶりに文化祭を復活させるとともに、運動会と球技大会を一つにまとめてスポーツ大会に一新させるなど、その他にも新たな取組を模索してきた。昨年以上に保護者の行事への参加と協力を得ることができ、日頃は目にできない生徒のいきいきとした表情を間近に見ることができた。文化祭やスポーツ大会では、生徒会執行部が中心となって行事の企画・運営に当たり、生徒主体の学校行事に一歩ずつ近づいていると考える。そのため、評価はBとした。

i) 修学旅行は本校生徒にとって社会体験を積み視野を広げる最適な学びの場である。様々な事情で全員の参加にはならなかったが、参加した生徒自身が事後アンケートで「良い社会勉強となった」「集団行動を意識しながらルールやマナーを守ることの大切さがわかった」「自分ではしようと思わないことができてよかった」などの感想を述べている。他にも本物のクラシックに触れる音楽鑑賞会、バラの接ぎ木体験、「テーブルマナー講座」「福山美術館・福山城探訪」など多くの外部講師や外部施設を利用した体験的な学びを実施でき、いずれも参加した生徒は肯定的な評価をしている。

j) 毎月1回LHRで、または考査前、行事前に清掃活動を実施している。教室以外の場所（トイレや廊下、昇降口、特別教室）も生徒は清掃に取り組んでいる。生徒全員で清掃活動の時間を設定し、日常的に校舎内外の美化を生徒に呼びかけることで、美化活動への関心・意欲の向上につなげている。2月27日には校外清掃活動を実施し、校内に限らず地域の美化活動にも関心を高める機会を設定する。また、本年度はペットボトルの分別リサイクルにも取り組み、生徒への環境保護への意識の向上も目指した。

【今後の改善方策】

h) より生徒主体の学校行事となるように、生徒会執行部が中心となった行事運営を行う。また、保護者に呼び掛けて、各種行事への参加と協力を得るようにする。行事の前後に教職員間での協議と反省を丁寧に行い、改善に向けてのアイデアを共有しあう。目標値については、現状も高い数値であり、それを落とさず維持していくことを目標にしていきたい。

i) 今年度様々な外部講師や外部施設を利用した行事を行うことができたが、どれも参加した生徒は肯定的な反応をしている。これらの行事を継続するとともに、今後は全校生徒対象の行事を増やし、またその参加率を上げる工夫を行っていきたい。

j) 引き続き、清掃活動やリサイクルへの取組を通して、社会への貢献と参画意識を育てていく。取組を継続する中で、責任感や自己有用感を感じ取れるようにする。校内の美化活動とあわせて、身の回りの整理整頓への認識を持たせるためにも、教職員が率先して日頃の教室整備を行うとともに、清掃活動では教職員が範を示し、積極的に生徒を指導する。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
4 働き方改革							
5) 業務改善の取組を進め、職員の在校時間を縮減する。	k) 職員の勤務時間外の平均(月)	22時間	20時間	24時間	B	前年度実績値及び本年度目標値よりも実質的な数値が増加し、目標値に達していない。	校務運営 会議
	l) 業務改善の取組について、学校全体で取り組んでいる(肯定的評価)	60%	65%	60%	B	昨年度の実績値と同じであり、本年度の目標値に達していない。	校務運営 会議

【評価結果の分析】

k) 勤務時間管理システムの入力を通して時間管理の意識は定着してきていると考える。しかし、本年度は年度途中の移動を含め5名の教職員が入れ替わった。前任校との違いに戸惑いながらも、協働的に職員が業務を進めてきた。これまでの取組に加えて、文化祭をはじめ、これまでにない新たな取組にも挑戦するなど、チームとして頑張ってきた。目標値はオーバーしたものの、これらの要因も考慮して評価をBとした。

l) 組織が一体となって業務改善に取り組まなければならないが、約半数の教職員が移動したこともあり、一人ひとりに業務上の負担が生じてしまった。次年度は、全体で協議する中で業務の精選を図っていく。目標値には達していないが、前年度と実績値は同じであることから評価をBとした。

【今後の改善方策】

k) 教職員の時間管理意識をさらに定着させるために、勤務時間管理システムの結果を定期的に周知していく。また、定時退校日だけでなく日常的に早めの帰宅を促していく。時間外勤務の縮減は業務改善の取組とリンクしており、教職員が協働的に業務に当たっていくことが、ひいては時間外勤務の縮減につながっていくと考える。今後とも、チームで課題解決に当たっていく雰囲気を醸成していく。

l) 常に組織で協議をする風土をつくりあげる。その中で、業務の精選を常に行いながら、新たな取組にも挑戦できる組織づくりを推進する。

令和元年度自己評価シート（年度末評価まとめ）

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	小林泰崇	全・定・通	本・分
----	----	-----	--------------	------	------	-------	-----

1 評価結果の分析と改善方策

■ 考え抜く力の育成

○基礎学力の定着と活用力の育成

授業進度に合わせたプリント学習や反復学習によって、基礎的・基本的な学力は次第に定着してきていると考える。しかし、学んだことを活用しながら主体的に問題を解決しようとする段階にまでは至っていない。そのため、定期考査で記述形式の活用問題を出題している。当初は無回答の割合が高かったが、正答ではなくても試行錯誤しながら記述する割合が増えている。今後は、教育活動全体を通して、「思考・判断・表現」をさせる取組を行い、表現する力を高めていく。

○学習意欲の向上

各種検定試験において、新たな級や資格に挑戦する生徒の数を指標として取り組んできたが、目標値を大きく下回った。本年度の受検にはつながらなかったが、放課後等の時間に個別指導は行っており、引き続き個別の声掛けや指導を継続して行うことで、次年度の受検につなげていく。各種検定試験を受検することの意義を将来の進路と関連付け、次年度の受検に向けた取組を組織的に行う。

■ 前に踏み出す力の育成

○他者との関わりを通した社会性の育成

・自ら進んで挨拶をしている生徒の割合は昨年度の実績値及び目標値を少し下回った。生徒の中には自分に自信が持てず、挨拶に対して恥ずかしさと抵抗感を持つ生徒がいる。登校時及び下校時の指導場面で、挨拶を習慣化させるとともに、教職員が率先して範を示していく。

・遅刻してくる生徒が固定化している。学年が上がるにつれてその傾向がみられる。全体への声かけだけでなく、日常的に保護者と連携をとるとともに、個別に指導・助言する機会を定期的に設定していく。

・問題行動の発生件数は昨年度に比べて7%減少した。組織的な取組を丁寧に行ってきた成果だと考える。全体としては、行動面において落ち着いてきている。ただし、同じ生徒が問題行動を繰り返す傾向がみられ、再発を防ぐ指導の在り方を工夫していく必要がある。

■ チームで働く力の育成

○体験的な学びを通した協働性の育成

・学校生活アンケートによる、学校行事の満足度は86%であった。目標値には届かなかったが、昨年度の実績値を上回った。文化祭の復活に加え、その他の行事においても新たな工夫を重ねてきた。各行事では、日頃は見ることができない生徒の生き生きとした表情を見ることができた。昨年以上に保護者の参加と協力を得ることができた。

・本年度は、「テーブルマナー講座」に加え、教科横断的な授業である「福山美術館探訪」や総合的な学習における「バラ苗の接ぎ木講座」など多くの外部講師や外部施設を利用した体験的な取組を行った。いずれも生徒の肯定的な評価は100%であり、生徒の感想からも社会的な視野の広がりにつながったと考える。引き続き、様々な体験的な取組を生徒に提供する。

・本年度はLHRでの清掃活動（教室、廊下、トイレ、昇降口、通路）に加え、リサイクルへの取組として、ペットボトルの分別回収も行った。これらの活動を通して、他者への配慮や社会貢献の意識を高めていくように指導を継続する。

■ 働き方改革

○業務改善の取組

・時間外勤務の平均は24時間で、目標値には少し達していない。本年度は約半数の教職員が入れ替わったことや、文化祭等の新たな取組にも挑戦したことが影響していると考え。前任校との違いに戸惑いながらも、教職員は協働的に業務にあたってくれた。このことは、次年度の業務改善につながるプラス要因として捉えている。教職員が協働的に業務に当たっていくことが、ひいては業務改善の取組をすすめることにつながると考える。

2 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策

○今後の具体的な取組

- ・学年を超えた行事を通して生徒同士のつながりを深めていくことで、定時制としての一体感を構築していく。
- ・体験的な学習を通して、地域とのつながりや社会的な視野の広がりをつくりだすことで、社会性を育成する。
- ・英語検定や情報検定等の資格試験への受検を一層推進することで、自己のキャリア設計を確かなものにする。
- ・情報共有を軸にして教職員が協働的に業務に当たっていくことで、これからの取組をより確かなものにする。

令和元年度学校関係者評価シート(年度末評価)

令和2年2月19日

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	小林泰崇	全・定・通	固・分
----	----	-----	--------------	------	------	-------	-----

評価項目	評価	理由・意見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> ・定時制の生徒・保護者のニーズに応えるための目標は適切であるとともに、スジの通った計画になっている。指標としても客観的な事実に基づいた結果評価ができるものであり、計画の適否を判断することができるよい指標となっている。 ・思考力・表現力や学ぶ意欲を高める今日の課題(本質的な)に対して活用問題からアプローチし、記述を求める取組みは的を射たものであり、その精度を高めていって欲しい。 ・ミッション、ビジョン、環境分析に基づき、目標、指標、計画が実効性を伴うよう関連づけられ、概ね適切な設定となっていた。 ・生徒実態を考えた上で様々な目標を設定されているが、数値目標にはなじまない内容も多く、数値以外の評価指標も考えられないかと思う。 ・適切な学校経営目標が設定され、具体的な行動計画や評価指標が適切に設定されている。
計画の進捗状況の評価の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> ・学校として力を注いでいる項目には数値目標が設定されており、その達成状況がよくわかる。また、その達成状況への評価も適切である。生徒の変容がなくても、教員が努力をして進めてきた取組みには良い評価をしてあげてほしい。 ・実績値に基づく達成状況について、概ね適切な評価がなされていた。 ・「職員の在校時間の縮減」について、勤務時間外が24時間というのは適正な時間ではないか。これは一日1時間ということであるが、生徒指導などで時間外とはいえ対応すべきこともあると思われ、何もなければ時間通りに業務を切り上げればよいのであって、この程度の時間は許容範囲と思うが如何であろうか。 ・計画に対する各項目の進捗状況を的確に把握し、評価も概ね適切である。
目標達成に向けた取組の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> ・「体験的な学び」を仕組みで視野を広げていくことが、生徒の主体的な進路目標設定や学びの意欲の向上につながっていくものとする。「何のためにこの体験を積ませるのか」ということを生徒・教職員で確認し、体験を通じて得られたことを振り返ることが大切だと思う。 ・目標達成に向けた取組みは、行動計画に基づき概ね適切な内容だった。 ・学校行事や「体験的な学び」については、積極的に取り組んでほしい。その際に生徒が主体的にし始めるのを辛抱強く待つことも必要か考える。それにはある程度の時間をかけて実施してほしい。 ・目標達成のため定めた行動計画に対し、概ね適切に取り組まれている。
評価結果の分析の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な数値で評価がなされているので、客観的であり適切に分析されていると思う。いずれの取組みも最終的には、進路実績に結び付くもので、進路実現に係る課題を核にして、そこから掘り下げていくことが必要。 ・各項目に対し、具体的な事実に基づいた現状と課題が明示され、概ね適切な評価結果の分析がなされていた。C評価の項目については改善方策へ反映させるべく、現状と課題についての綿密な分析が必要である。 ・基礎力定着問題の通過率が、教科担任の異動で出題傾向が変わったために単純比較できないとあるが、それは当然のことであり、あまり細かい数値にこだわる必要はないと考える。 ・問題行動が減少したとはいえ、90件ということは、少なくとも週に3回程度は発生しているということであり、先生方のご苦労が察せられる。半面多くの生徒は、目的を持って高校生活を送っているのだから、この生徒たちに悪影響を与えるようなことに対しては、断乎たる指導をしていただきたいと思う。 ・実施状況が客観的に評価され、現状分析も概ね適切に実施されている。
今後の改善方策の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> ・改善方策は適切なものが設定されている。ただ、改善策として行っていることの最終ゴールは何かを明確にして、そこから各取組みを関連付けていくと、意図がはっきりと見えてくる。最終的には、生徒が進路を主体的に決定していくことだと思うので、そこを核にして各取組みを関連付けていければよいのでは。。 ・各項目の評価結果の分析内容に対応した改善方策が詳細に示され、概ね適切な内容だった。ただ、評価Cの項目に対しては次年度につながるより実効的な方策が求められるように思う。 ・「常に組織で協議する風土をつくりあげる。」ということであるが、なんでも協議をしたら前に進まないのではないか。何のためにするのか云う意識統一ができれば、実施に向けては組織的にすれば良い。 ・評価結果分析に対し、具体的な改善策が適切に示されている。
総合評価	B	<ul style="list-style-type: none"> ・これからの社会では、自分と異なる人を理解しその中で合意を形成していくことが求められている。そのために、視野を広く持ち教養を高めていくことやコミュニケーションを積極的にとっていくことが大切である。定時制の取組みは、以上のような力をつけていくために、さまざまな取組みを実施されていると感じた。取り組んでいることは間違いのないので、一つ一つの取組みにしっかりと意味づけをしてほしい。 ・生徒状況を的確に捉えた内容であり、個別及び集団としての取組による充実した教育が伺える学校評価だった。次年度の経営計画に向け更なる充実を期待する。 ・生徒のほとんどは、今までの学校生活の中で何かをやり遂げたという達成感や、自分に自信を持って行動するという経験が少ないのではないかと思う。その中で、検定試験へのチャレンジ、文化祭やスポーツ大会などの学校行事の活性化に取り組んでおられる。これらのことを継続することで、新たな伝統を創ってほしい。 ・総合的に見て、目標の設定から達成状況の把握、分析、評価、今後の方策まで、概ね適切に行われている。